希
のぞみ

希　08

藤沢みや（miya）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18579922

ヒュンマ

ダイ大　ヒュンマ小説です。
本編が終わってから二年後にダイが見つかり、しばらく経った後のお話です。ヒュンマ、ポップ→←メルル、ダイレオ、アバフロ、アポマリ前提でお話が進んでいます。
ちょっと大人向けの話題や匂わせがあるので、わからない方は大人の方に聞いたりしないで、こっそりと調べましょう。（こら）
◇マァム視点　◆ヒュンケル視点

希　08

◆

「おはよう、ヒュンケル」
　覚醒し、うっすらと目を開けていくと左側から声を掛けられる。
「おはよう、マァム」
　横を向けばマァムが可愛い笑顔を浮かべている。
　いや、マァムはいつも可愛い。
「今日、出発ね」
「体は大丈夫か？　朝食を食べたら早めに出ようかと思っていたが」
「大丈夫！！」
　マァムは真っ赤な顔で上下に首を振る。凄い勢いだ。最後まで致してはいないが、いろいろと彼女の体に負担を掛けたはずだ。
「いや、だが」
「本当に大丈夫！！！」
　耳まで真っ赤にしてマァムが叫ぶ。
　目を瞠っているとマァムが赤い顔を逸らして、小さく「……は、恥ずかしいからそういう話題は、二人きりの夜だけにして」と呟く。
「わ、わかった！！」
　彼女の恥ずかしさが移ったかのように、自分の顔も朱に染まる。ああ、可愛い。
　この手に入れた幸せを、オレは離しはしない。
　改めてそう誓って、朝の支度を始める。

　――――　きっと、オレは毎朝、改めて誓い続けるだろう。

　そんな予感に喉の奥で小さく笑う。

手続きを終え、宿屋を後にする。
運良く晴天。
賑やかな街を抜けて隣町への街道を進む。しばらくの間はこの街道沿いを進む予定だ。
今回はホルキア大陸を横断し、ギルドメイン大陸へ船で渡り、ギルドメイン山脈を北上……テラン王国の北側を抜けて、カール王国とテラン王国の狭間くらいからまた船でロモス王国のあるラインリバー大陸へ渡るつもりだ。
マァム一人の場合はここまで険しい道筋は辿る予定はなかったが、ヒュンケルと二人ならば可能であろうという判断である。
一ヶ月から一ヶ月半をかけて、この道を二人で辿る。
険しいが、オレ達二人なら大丈夫だろう。
それに、オレは一度クロコダインとこの道を旅したことがある。

晴天の下、自分たちとしてはのんびりと歩いてると、マァムが見上げてきた。
「ヒュンケル、あの親子のお手伝いをしたいんだけどいいかしら？」
つんつんと袖をマァムに引かれる。可愛い。
「親子？」
目の前に二人の子供を連れた女性の旅人がいる。
一人はぐずって母親に抱かれており、もう一人は道端に目移りして母親の手を引き剥がそうとしている。見ているだけで危険だとわかる。
マァムが足取り軽く駆け寄り「お手伝いします」と微笑む。
振り向いた女性は困ったように微笑む。
ヒュンケルは、自分の行きたい方向へ母親をぐいぐい引っ張る男の子の脇を掴んでさっさと肩車をしてしまう。

「すごーい！！」
　二人の駄々っ子を持て余していた母親は、目を見開くと申し訳なさそうに謝罪をする。マァムは意に介さず母親の腕の中の子供に手を振る。
「一歳くらいですか？　可愛いですね～」
　小さな子供はぐずったままだが、マァムの手を不思議そうに見たりもしている。
　微笑ましく見つめていると髪の毛を引っ張られる。
「おにーちゃん、あっち！」
「あっち？」
　子供が指で示す方向へ進むと頭上から楽しそうな笑い声が聞こえてくる。
「これ、食べる」
　足下を指差すので見れば、食べられる野草が生えていた。すり潰して、パン生地に混ぜるのだとアバンから聞いたことがある。
「これを摘みたかったのか？」
「うん！」
　我が儘に見えたが、その行動には理由があった。
　子供を下ろして、一緒に野草を摘む。
　途中、にーちゃん、それ違う！と子供に怒られたりしながら……
「ヒュンケル」
　声を掛けられて見上げれば、小さな子供を腕に抱いていた。

　―――聖母だ。

　反射でそう思って、首を僅かに振る。
　彼女はオレにとって特別だが、聖母ではない。
　神聖なる女性という存在。父から繰り返し学んだ守るべき存在。それが自分にとっての聖母。だが、マァムは隣を一緒に歩くべきたった一人の女性だ。
「この子、抱っこできる？」
　にっこりと微笑まれて瞬く。「はい」と幼子を渡されて、抱き方を教えて貰いながら、なんとかいい感じに支える。

ぐにゃぐにゃして怖い。
　とても恐ろしい。
　この高さから落としたら、こんな幼子はどうなるか……そう思うだけでも恐怖で震えそうになる。
　小さなオレを見つけた父さんは、きっとこんな思いを毎日していたに違いない。こんなに小さいのに、生きている。睫毛も爪も大人と同じように生えていて吃驚するしかない。
「ボク、お名前は？」
　マァムは野草を摘むのに夢中になっている、中くらいの子供に声を掛けている。腕の中の子供が小さい子供、下で野草を摘んでいるのが中くらいの子供だ。
　マァムは中くらいの子供から名前以外にもいろいろ聞きだして、仲良くなっていく。
「ぼくが、おうちまでつれていってあげゆ！」
　小さな手と、とても小さな手がきゅっと握られるのを不思議な思いで眺める。
　今までの人生とは全く関係のない、平和な光景。
　なんというか、胸に差し迫るこの感覚が、くすぐったくて苛立って……そして涙が浮かびそうになる。
　そんな思いに封をして、オレは小さなぐにゃぐにゃな塊を落とさないように注意しながら歩む。子供はオレのヘタクソ加減など意に介さず、グースカ眠り始めた。ほっとする。
　その後は、母親のペースに合わせて進む。
　正直に言って遅いが、この親子を見放すことはできない。
「すみません、ご迷惑をおかけして」
　ぺこぺこと本当に申し訳なさそうに謝る女性にオレは微笑を頑張って浮かべる。この顔は、気合を抜くとのっぺりとした無表情になってしまう。気を付けなければ。
「いえ、妻が困っている人を放っておけない性格をしていますので、よければ甘えてやってください」
　さらりと未来の光景を混ぜ込む。
「まあ、奥様！」
「彼女のご両親へ挨拶に行く途中なんです」

「えっ、あっ、はい！　そ、そうなんですっ」
　マァムが顔を真っ赤にさせて同意するのを眺めて、可愛いを反芻する。
「素敵ですね」
　女性の心の底からそう思っている声に、マァムははにかむような笑顔を浮かべる。
　マァムが耳打ちをしてくれたが、彼女は妊娠をしているらしい。その彼女のペースに合わせて歩くより、オレが担いだ方が早いのではないかと言えば、困ったようにマァムは肩を竦めた。
　人にはいろいろな事情があるものだ。
「あ、あの青い屋根の家です」
　しばらく歩いて進むと、林の奥の方に……青い屋根が見えてきた。意外と大きな建物らしい。
　小さな子供を先に返して、それからマァムが中くらいの子供の背中を押す。
「ほら」
「……かーしゃん、ぼくがまもる」
　……いつの間にか、小さな勇者が生まれていたらしい。
　オレは笑いそうになるのを懸命に堪える。
「お兄ちゃんなんだもの、お母さんと弟たちを守るのよ！」
「うん！！」
　マァムの声掛けに中くらいの子が元気に返事をするのを、母親は痛そうな顔で見つめている。
　話し掛けようと小さく口を開いて……逡巡して閉じる。
　その様子は、何かを隠す人。
　――――　悪いことを隠しているけれど、本心では誰かに縋りたい人の仕草。
　そんな母親を見て、子供が「あ、おうちまであんないするって、ぼく、いった！」と懸命に声を上げる。
「え、いえ！！　ここまでで……大丈夫です」
　慌てて子供の言葉を遮る声音が、もう全然大丈夫ではない。
　隣のマァムを見ると、彼女はにこにこしながら「案内してくれるの？」と母親を無視して子供に声を掛ける。

「うん、あんないすゆ」
「そっか～、ありがとう」
「……せっかくのご縁ですし……お家まで、お送りします」
　オレは騎士のような誠実な笑顔を浮かべようとするが……浮かんだのは、アバンのような胡散臭い笑顔でしかなかった。

◆

　林を進むにつれ、子供と母親の表情は硬くなっていく。
　梢を飛び交う動物の些細な音にも過敏に反応して、怯えていた。
（助けましょうか？　救いましょうか？　初対面でそんなことを言ってくる奴は……甚だしく胡散臭いな）
　ヒュンケルは手を繋いで歩くマァムと中くらいの子の背中を眺めて、目を細める。
　彼女のとなにか打ち合わせをしたわけではないが、様子見をしようという意思はお互い疎通できている。
　帰る場所が怯える場所。
　それがヒュンケルにとっては腹立たしく、この縁で……この親子に何かができるのであればいいと思っている。
「……！」
　あともう少し……青い屋根の建物の全体が把握できそうな場所で、先にある建物群に嫌な気配がある。
　マァムに目線をやれば、彼女もこくりと頷いた。
　ぱっと見は、単なる小さな村。
　けれども……村人の気配は歴戦の猛者のような雄々しさだ。
　弱い者をあげつらうような雄々しさであるが。
「おいっ！　いつまでかかって……」
　女性を見つけた男が、怒鳴りながら近付いてくる。女性は「っひ！」と息を呑むような小さな悲鳴を上げると、子供を抱き締めて震えていた。

「ゃ……ああ、いらっしゃい」
　そんな女性を意に介することなく、男はへらりと笑いながら、マァムを舐（ねぶ）るように眺める。下から上へ……胸部のあたりで口笛を吹きそうになる当たり、下品過ぎる。
　そしてオレを見て、小馬鹿にした笑顔を浮かべた。
　その瞬間、風が舞う。
　音も気配もさせずに、マァムが男の腹を膝で蹴り上げ、意識を奪う。一瞬のことだった。
「デルデル」
　オレは姫に託された荷物の中から縄を取り出すと、手早く捕らえて、木の幹に結び付ける。下生で隠れて見えにくくなるように工夫はしたが、男の図体がでかすぎて、中途半端になってしまったのは仕方がない。
　呪文で出てきたのは、縄、猿轡、革紐。あらゆる紐類が出てくる。
　どんなものも捕縛し放題だ。
　それらを呪文を唱えて収納する。
「……ねえ、ヒュンケル。いきなり蹴るのはアバンの使徒としては短気過ぎたかしら？」
　ガタガタ震える親子を眺めて、マァムが腕の中の子供をよいせと抱え直す。
「この二人の様子を見るに、余罪は山のように出てきそうだが……」
「とりあえず、お姉さん。ちょっとだけ事情を聴いてもいいかしら？　安心して、私達、と～っても強いの」
　にこりとマァムが微笑む。
　その笑顔を見て、女性は……ぽかんと口を開けて、その場にへたり込んだ。

　呆然自失の体の女性から話をマァムが聞き出す。
　曰く、この村は盗賊の隠れ里のひとつで、山奥の盗賊の里から

『狩り』に出る際の足掛かりとする……拠点でもあった。
　女性は、マァムたちが泊まった街にある拠点のひとつから移動する際、子供の鳴き声が煩いと馬車から強制的に降ろされ、徒歩での帰宅を余儀なくされたのだという。
　帰っても殴られる。
　帰らなくても連れ戻され、殴られる。
　そのために進む足は遅くなり、子供が遊びながら歩むのを止めることなく……ただ、途方に暮れながら歩いていたのだという。
「ふ～ん」
　マァムのこめかみがピクピクしている。
　相当お怒りらしい。
　それは自分も同じだ。
　小さな村だ。
　気配はそれほどでもない。
　五十以下だろう。
　二人で倒せない数ではないが、ただこの女性たちを放置するわけにもいかない。
「盗賊以外にも非戦闘員はいるの？」
　マァムの問いに、女性は首を傾げた。
　おどおどと、他の人とは交流がなく、この村に何人の人がいるのかするもわかっていないと言う。
　情報があまりにも少な過ぎる。
「普段は、あの部屋にいて……」
　指差した先の三階の角部屋。
「……へえ」
　マァムがふっと消えた。
　窓際の木を利用して、三階の窓枠に飛び移り、中を確認して窓を開け放つ。バギを線のように細くして鍵のあたりを開けたのだろう。アバンの使徒は腕のいい盗賊になれそうな器用さだ。なんだかおかしくなる。
　マァムとポップ、メルルは旅の間の暇つぶしに、呪文をどれだけ小さく出せるか競っていたという。マホイミから、他の呪文も同じように小さくすれば別のことに転用できるのではないかと検証した

という。
　ちなみに最大は諦めたらしい。
　止めてくれてよかった。地形が変わる。
　窓を開け放ったまま、マァムがひょいっと戻ってくる。
「三人にはあの部屋に籠ってもらいましょう。その間にヒュンケルは応援を呼んできてくれる？」
「ああ。だが、籠るのはマァムも一緒だ」
「私一人でも叩きのめせるわ」
「駄目だ」
　オレは短く言う。
　ただでさえ危険なところに彼女を残すのだ。
　いくら盗賊が非力とはいえ、数が多ければ彼女が不埒な目に合うのは想像に難くない。女性を性欲解消の道具としか思っていない男はどこにでもいる。
「すぐに戻る。戻ったらすぐに声を上げるから、それまで我慢してくれ」
「……わかったわ」
　いくら力があるとはいえ、油断は禁物だ。
　今、この場で彼女が危険な目に合えば……オレはこの村など簡単に焼き尽くすだろう。
「マァム、オレはこの村を殲滅したくない」
　短く言う。
「それに、応援が来るまで彼女たちを守り、安心を与えるのはマァムの役目だ」
「そうね……」
　マァムは、座り込んだままの母親に強く抱き着く中くらいの子供を眺める。
「失礼」
　マァムはそう言うと、女性を抱き上げる。その上に、亀の子を置くかのようにオレは中小の子供を積んでいく。
「へ？……っへ！？　ぃ…………！！」
　声のない悲鳴が空に舞った。
　マァムは三人を抱えて跳躍し、先程の窓まで戻る。無事に部屋の

中に入ったのを確認して、ヒュンケルはキメラの翼を取り出した。
「パプニカ王城」
　こういう非常事態の時、頼れる仲間は……パプニカにいる。
　不死騎団長のオレが……攻め入った国に。

◇

　部屋の中に入って、こびり付くような異臭に眉根を寄せる。
　この女性は、あまりいい扱いを受けていなかったのだろう。女性の尊厳を叩き潰すような扱いしかされていなかったのかもしれない。
　静かに窓を閉め、マァムはその苛立ちを飲み込んで「よいせ」とクローゼットを扉の前に移した。そのクローゼットを開いて、椅子や小さめの鏡台など、入りそうで重そうなものを積んでいく。
　これで、扉から入ることはできないだろう。
　ベッドからシーツを剥がして、女性に渡す。
　そして、ベッドを片側の壁に立て掛ける。これで壁を蹴破られても、すぐには入ってこれないはずだ。
「おねえちゃん、すぎょい……」
　子供はきゃっきゃっと喜び、女性は目を見開いて口をぽかーんと開けていた。
「しーっ」
　と唇に指を当て、声を出さないようにジェスチャーをする。
　ざわざわと下から男たちの声が聞こえ始めた。
　木に括り付けた男に気付かれたようだ。
　怒声に嘲笑、下卑た声。
　守るべき者を守らない、獣（けだもの）のような男たちの声に、眉根が寄る。
　外に出て行って、倒してしまいたい。
　倒せると思うし、倒したい。

けれど……マァムは昨夜のことを思い出す。
　大勢の男に囲まれて、太刀打ちできない可能性はわずかばかりある。特にこの三人を人質に取られでもしたら、自分は彼らに囚われに向かってしまうだろう。
　あんなことを、ヒュンケル以外の男にされたくない。

　―――　自分は弱くなった。

「……あ、あの……いつまでこのまま隠れていればいいのでしょうか？」
　不安そうに女性が見上げてくる。
　いや、強さと無謀は違う。
　今は、この人たちを守るのが自分の責務だ。ヒュンケルが絶対に応援を連れて来てくれる。
　心の底から信頼できる、強力な仲間を。
「とりあえず……腹が減っては戦はできないというでしょ。静かにご飯を食べましょう」
　マァムは「デルデル」と小さく呟いて、非常食を広げた。

◆

　ヒュンケルがキメラの翼で戻ってきたのは、つい最近出てきたばかりのパプニカ城。
　出戻りが早過ぎる。
　苦笑しながら門番に挨拶して城内に入る。
　そして、アバンが改めてきちんと道具にしたリリルーラ草を用いた道具を使い、仲間の下へ移動する。
　思い描いたのはポップ。
　姫は政務があって、もしかしたら大事な会談などしているかもしれない。ダイも姫に付き添っていることが多いから、二人の下へは一度許可を得てからのがいいだろう。

アバンはこの城内にはいない。だが、やはりアバンよりも先に浮かんだのはポップだった。
「っひゃぁ？」
　素っ頓狂な声をポップが上げる。
「ヒュ、ヒュンケル！？」
　口も目もぽかーんと大きく開けて、天才魔導士は動きを止める。
「助けてくれ、ポップ！」
　オレの短い言葉に、ポップはせわしなく瞬きをしてから、「おうよ！！」と返事をしてくれた。
「あら、私たちは～？」
「オレたちは仲間外れ？」
　大事な仲間の拗ねた声が聞こえて、オレは微苦笑を浮かべる。
　ちょうど、三人で休憩をしていたようだ。
　庭園の休息所でお茶にしていたらしい。ダイの前にだけ鳥のフライが盛りだくさん置かれていた。
「盗賊の村を見つけた」
「「「へ？」」」
　三人が揃って声を上げる。
「マァムが一人で非戦闘員を守っている。盗賊は五十名程度。すぐさま叩き潰したい」
　オレの言葉に、からかう表情を瞬時に収めて、三人は「「「わかった」」わ」と声を揃えた。